

日本ミッシェン支部としてのハワイ伝道

—O・H・ギューリックとハワイ日本人伝道—

吉 田 亮

はじめに

一、ハワイ日本人伝道の位置付け

(一) ギューリックのハワイ訪問

(二) ハワイアン・ボードのギューリック獲得への努力

(三) ギューリック夫妻のハワイ赴任にまつわる問題点

アメリカン・ボードとの交渉開始

日本ミッシェンの反応

ギューリックの使命感とアメリカン・ボードの決定

二、ハワイのアメリカへの合併と日本人

(一) ハワイ革命

(二) 共和国支持

(三) アメリカへの合併と日本人

三、日本ミッション支部

- (一) 日本ミッションとハワイ伝道
 - (二) 耕地農民の教化
 - (三) 教育事業
 - (四) 日本人教会の設立
- むすび

はじめに

本稿はO・H・ギューリック(Orramel H. Gulick)のハワイ日本人伝道を検討することを通して、日本ミッション宣教師のハワイ日本人伝道およびハワイ日本人社会に果たした歴史的かつ社会的役割を究明するものである。

従来の研究成果の中で、海外日本人への伝道を考察するに当たって、在日アメリカ人宣教師が果たした役割を検討したものは少ない⁽¹⁾。その意味で本研究は不十分ながらも、「移民社会とキリスト教」という大きなテーマに在日アメリカ宣教師の果たした役割という面から接近するものとして意義があらう。

さて、ギューリックのハワイ日本人伝道については、Albertine Loomis, *To All People: A History of the Hawaii Conference of the United Church of Christ* (Honolulu: Hawaii Conference of the United Church of Christ, 1970) や Mary I. Kuramoto, *Dendo: One Hundred Years of Japanese Christian in Hawaii and the Nuuanu Congregational Church* (Honolulu: Nuuanu Congregational Church, 1986) と言及が

見られる。前者は、ギューリックのハワイ赴任への経緯と奥村多喜衛のギューリック観について少し言及している。^②後者はギューリックの伝道活動について少し言及している。^③しかし、双方ともギューリックの伝道活動を総合的に把握、その歴史のかつ社会的な意義を考察するまでには至っていない。ところが、ギューリックは一八九四年から一九一二年まで一八年間もハワイ日本人伝道に寄与した人物であり、彼の影響力は大きかったはずである。ちなみに、『とも』(一九一一年五月)ではギューリックをこう評している。^④

自から奉ずること頗る薄く。而して喜んで公益のため力を到す。氏の如きは蓋し甚だ稀ならん。曩に氏夫妻の金婚式に逢ふや。日本人教役者は相図つて金時計を贈りその佳辰を祝す。永く銀時計に満足せし氏の胸間。爾来初めて金時計の佩びらるゝを見る。神に献げ公益に寄与する金あるも自己の騎奢嗜好に費すべき錢なき。氏の性情如何にゆかしきかな。……氏が正当に且つ善意をもつて在留同胞を紹介しつゝあるもの。我同胞のため益する所如何ばかりぞや。吾人は天国拡張のため。我同胞福祉のため。氏の健在を祈るや切なり。

恐らく筆者は奥村多喜衛と思えるが、日本人伝道者がどれほどギューリックを慕い、高く評価をしているかを示している。ではこれほどまでに評価されたギューリックは、ハワイの日本人に対してどのような考えに立って、どのような伝道活動を行なったのであろうか、またその伝道は、当時の社会的状況にあって、いかなる歴史の意味をもっていたのであろうか。

本稿では、特にギューリック夫妻がハワイに立ち寄った一八九二年から、ハワイがアメリカに合併される一八九八年までの彼の活動に焦点をあてて考えたい。初めにことわっておきたいことは、本研究ではギューリックのハワイ伝道一八年間をまとめて総括的な評価を下しえていない上に、考察をあくまでギューリックの考え、および活動にしばり、当時ハワイで活躍していた日本人伝道との連絡・交渉にまで考察がおよんでいないことである。それらについて

は今後の課題としたい。

一八九二年から一八九八年といへば、日本国内では日清戦争をはさんでナショナリズムが高揚する時期であり、組合教会にとっては、アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) からの独立自給問題や朝鮮伝道などが論議される頃である。そしてハワイでは、リリオカラニの君主制が倒れ共和国が成立し、一八九八年のアメリカへの合併に向けた長い政治的かけひきが、日本をも含めて、太平洋をはさんでハワイとアメリカとの間でなされていたのである。一方ハワイの日本人は、移民法の改定、参政権の剣奪、上陸拒否などさまざまな圧力をハワイ政府より受け厳しい時期を迎えていた。またキリスト教界では、メソジスト教会 (Methodist Episcopal Church) の伝道再開、組合派の日本人伝道の再建及び岡部次郎の辞任などの問題以外にも、ハワイの日本人社会が内包する飲酒、賭博、「売娼」、「子弟」教育その他多くの問題に、従来にも増して取り組まねばならない時期であった。

ここではギューリックの伝道を考察するに当って、まずハワイ赴任の経緯、ハワイ、アメリカン両ボード及び日本ミッション (アメリカン・ボード傘下の) との関係、彼の伝道のハワイ共和国の中における社会的役割、そして日本人伝道への取組みのあり方などを見ていきたい。

なお、資料は主にギューリックのアメリカン・ボード及びハワイアン・ボード (Hawaiian Evangelical Association) 宛の書簡を用いた。

一 ハワイ日本人伝道の位置付け

(一) ギューリックのハワイ訪問

ギューリック夫妻は、一八九二年七月一日その赴任地であった熊本を後にし、横浜より七月一六日出発のオセアニック号 (Oceanic) に乗って、七月二六日に二十二年ぶりに生れ故郷であるハワイに到着した。一八九二年といえ、熊本では一月一日に熊本英学校の奥村禎次郎 (江口一民) の教師解雇問題が起こり「熊本英学校事件」、徐々に宣教師と日本人経営者との間に不和対立が起こりかけていた頃である。ギューリックはクラーク (Nathaniel G. Clark, Corresponding Secretary of ABCFM) 宛書簡 (一八九二・七・二五) で、この事件によって二つの学校が並立してしまつたが、宣教師達はキリスト教主義の学校が二つできるのはよくないという立場であつた。しかし、熊本英学校長蔵原惟郭は新しい学校に反対するように求めたが、宣教師がそれに同調しなかつたので、蔵原は宣教師に対して批判的になつたと述べる。こうした熊本のぎくしゃくした状況が、ギューリックのハワイ赴任という決断にどれほど影響を及ぼしたのかは明らかでないが、後述するように、日本人の宣教師批判という点において多少影響があつたと思われる。

ところで、ハワイにおいて一八九二年七月といえ、メソジスト教会の総引揚げに対応して岡部次郎が日本人伝道者募集のため帰国し、奥亀太郎を連れて六月二〇日にホノルルに帰って来てまだ間がない頃である。岡部が日本滞在中にギューリックと会いハワイ日本人伝道について話し合つたかどうかは明らかでないが、少なくともギューリックがハワイに来ることについては、彼の兄弟からすでに聞いていたようである。ちなみに、ギューリックが岡部と会

うのは、今知り得る範囲では、彼が夫人 (Ann Eliza C. Gulick) と共に夫人の姉妹に会うためにハワイ島ヒロに行った時である。ギューリックの書簡には岡部といつ会見したか言及はないが、岡部の書簡によると、少なくとも八月一五日以前に二人は会っていることになる。⁽¹⁴⁾ その際、ギューリックは、日本から同伴してきた同志社の卒業生増田知次郎を岡部にひき合わせている。⁽¹⁵⁾ 残念ながら、このことに關してもギューリックは何も言及していない。⁽¹⁶⁾

ギューリックは、ハワイ島で九月初旬に開催されたハワイ島協会 (Association of the Hawaii Island) にエマーソン (O. P. Emerson, Corresponding Secretary of HEA) 等を同伴して出席し、ハワイ島の各人種の代表者達に会っている。⁽¹⁷⁾ その後の彼の行動についてはほとんど知り得ないが、クラーク宛書簡 (一八九二・九・一五) によると、ホノルルに到着して以来、ハワイおよび日本人に各六回説教したとある。また、一二月前後に、マウイ島に住んでいる弟トーマス・ギューリック (Thomas Gulick) の所に滞在し、その間トーマスが世話をしているパイヤ (Paia) 耕地の日本人に説教をしている。⁽¹⁸⁾

こうしてギューリック夫妻は、ハワイでの日本人との出会いを通して、日本人二万人への伝道の必要性を強く感じつつ、二月八日にベルジック号 (Belgie) でサンフランシスコを目指し、二月一七日にアメリカ本土に到着する。⁽¹⁹⁾

(二) ハワイアン・ボードのギューリック獲得への努力

ハワイアン・ボードは、ギューリック夫妻のハワイ訪問をどのように迎え、どのような考えのもとに、どのようにして二人をハワイに留めおくための努力をしたのであろうか。

ハワイアン・ボードは、ギューリック夫妻のハワイ訪問をすでに一八九一年六月九日付の彼の書簡によって知って

いたが、ザ・フレンド (The Friend) の八月号にさうそく彼を紹介した記事を載せ、暖く迎え入れた。そうして、ハワイアン・ボードは、ギュリック夫妻がこのままハワイに留まり、ハワイ人と日本人への伝道に従事してくれるようにアメリカン・ボードに要求した¹⁷⁾。どのような内容の要求であったかという点、ハワイアン・ボードとしては、困難を極めるハワイ人への伝道を献身的に行つたビックネル (James Bicknell) の後任として、ギュリックを迎え入れたい、彼ならハワイ語および日本語の両方ができるので日本人への伝道も兼ねてやってもらえる。ただし、ハワイアン・ボードとしては、今彼を雇い入れる財政的余裕がないので、アメリカン・ボードの決定にゆだねたい。つまりハワイの伝道の必要性のためにギュリックの赴任地を日本ミッションからハワイミッションに移しつつも、財源はハワイアン・ボードからでなく、アメリカン・ボードから引き続き援助をもらおうというものであった¹⁸⁾。ハワイアン・ボードとすれば、ハワイ人への伝道をビックネルに代わってやってくれる人物で、しかもメソジスト教会の総引揚げ以降伝道者不足になやんでいる日本人への伝道をとりしきってくれる人物が是非とも必要であった。ギュリックはその人物として最適であった。なぜなら、彼はハワイ出身でハワイの事情に通じているし、日本伝道の経験もある。しかもハワイ語、日本語の両方ができるとなれば、これ以上の人物はいなかつただろう。

こうしたハワイアン・ボードの要求に対して、アメリカン・ボードはどのような反応をしたのだろうか。スミス (Judson Smith, Corresponding Secretary of ABCFM) はエマソン宛の書簡 (一八九二・一一・六) で、ギュリックの所屬を日本からハワイに移すことを認めないという旨の返事をしたようである¹⁹⁾。

そこでハワイアン・ボードはすかさず、ギュリックのハワイ滞在を六カ月間延長するように、アメリカン・ボードに対して再び申し入れをした²⁰⁾。この申し入れは幸いにして、アメリカン・ボードの諮問委員会 (Prudential Co-

mmitee) で承認された。⁽⁸³⁾

しかし、事はこれで終わったのではない。個人的にはその後も、トーマス・ギューリックが、一八九三年四月一日付でクラークに対してアメリカン・ボードのギューリックに関する決定の再検討を要求したが、それに対して、何ら肯定的な応答はなかったようである。一八九四年になって、ハワイアン・ボードは六月に開催された総会で

“Request the A. B. C. F. M. to station the Rev. O. H. Gulick permanently on these islands as workers among the Japanese and Hawaiians” との決議をし、アメリカン・ボードに伝えた。⁽⁸⁴⁾

このように、ハワイアン・ボードは、ハワイのハワイ人および日本人への伝道の必要性という実地的な自分達のニードに答えられる最適の人物として、彼にハワイに来てもらいたかった。ただここで注意が必要なのは、ハワイアン・ボードはハワイ人への伝道を優先していたことであり、日本人伝道は、ついでに” というような認識があったようである。アメリカン・ボードとしては、ギューリックに日本ミッシヨンの仕事を続けてもらいたかったので、当然ハワイからの要求は、六ヶ月というおまけ付きで拒否した。ここでハワイの日本人伝道という視点から見ておくべきことは、ハワイアン・ボードにとって日本人伝道は、当然のことかも知れないが、ハワイ人伝道ほど重要視されていないことであろう。これだけの資料で決論は出せないが、ハワイの人口の中で唯一急増している日本人に対してこのような対応しかできないというのは、もちろんハワイアン・ボードのハワイ人伝道にける熱意もさることながら、ある程度日本人は「出稼せぎ」労働者であり定住性がないという移民の実情、ひいては将来日本人をハワイの一構成員としてどう扱うか——市民権か排斥か——という問題についてのボードなりの考え方が反映しているのではないか、という疑いを禁じ得ない。

こうしたハワイアン・ボードとアメリカン・ボードとのギューリックをめぐる交渉のある意味での決裂は、ギューリック夫妻自らの努力と、日本ミッシヨンの宣教師の理解によって打開されていく。

(三) ギューリック夫妻のハワイ赴任にまつわる問題点

アメリカン・ボードとの交渉開始

ギューリックはハワイアン・ボードの要望に対してどのような対応をしたのだろうか。

ギューリックは、ハワイアン・ボードが二人をハワイのハワイ人および日本人伝道のために招きたいという要求をしたことをエマーソンからの手紙によって知った時、全く予期していなかったので驚いた。彼はクラークにすぐ手紙を出して、次のように自分の考えを述べる。ハワイアン・ボードは、日本ミッシヨンからハワイミッシヨンに移って欲しいと自分に要望してきているが、赴任先はそもそも諮問委員会が決めるべきことであり、本人が口をはさむべきことではない。自分としては、今後も日本ミッシヨンに留まりたい。なぜなら、日本ミッシヨンにすでに長くかかわっており深いつながりをもっているのです、いまさらそれらのつながりを切る気はない。たまたもしアメリカン・ボードが、ハワイの日本人伝道を“*as a branch of your Japan Mission*”として認めてくれたらうれしい。実際この日本人伝道者達は、日本の教会や京都のトレーニング・スクールから直接来ている。このように、ギューリックは一応ハワイアン・ボードの申し入れに対して慎重な態度をとり、アメリカン・ボードに対して忠誠心を示しながらも、ハワイ伝道の可能性を日本伝道の“支部”という位置付けをすることによって糸口をみつめようとした。つまり、アメリカン・ボードの日本ミッシヨンとの関係を保ちつつハワイで自分の仕事ができるという妥協案を、アメリカン・

ボードがハワイアン・ボードに対して返事を出す前に提案した。

ギューリックは同時にエマソンに対して手紙で、自分としては日本もハワイも大事なので、個人的には両方ともとりたいたい。しかし、こうした決定は本人がすべきものではなく、諮問委員会にすべてゆだねられるべきものである。で、ハワイアン・ボードはこの決定を長く待てるかと尋ねている。これは、ハワイアン・ボードの要求が、諮問委員会ですら簡単に受け入れられないことを示すと共に、自分としては時間をかけてでも取り組む用意があることをも示唆している。

そうするうちにエマソンからの手紙（一八九二・一一・一八）で、アメリカン・ボードが、六カ月間だけハワイ滞在を延長したことを彼は知った。⁹⁷ギューリックはそれを受けて、クラーク宛の書簡（一八九二・一二・二四）でこう述べる。六カ月をいつとるかについては、今回は二月八日まで以上滞在期間を延ばせないで、本土から日本に帰る際に六カ月間ハワイに立ち寄りたいたい。ハワイの日本人伝道については、ハワイにいる二万人もの日本人を対象とするとはかなり手にあまるフィールドではあるが意味でそれだけ大きな成果が期待できる。なぜなら耕地の日本人労働者は日本と違い、仏教僧侶の影響下にないし、また家族や親族からの反対もないので、安心してキリスト教にいらることができるところがメソジスト教会がハワイアン・ボードに日本人伝道を依託したにもかかわらずあまりに伝道者が少ない。現在、組合伝道会社から選ばれた三人「奥亀太郎・江上源三・高森貞太郎―吉田」および岡部次郎、峰岸繁太郎しかいないので、至急伝道者が必要であると述べる。ギューリックのこの見方は日本での伝道経験を踏まえている。ここではっきりと日本での伝道の障害になっているもの（仏教徒からの排斥・親族からの反対）がハワイには見い出されない。いやまだ大きな問題とはなっていないことを示している。一方疑問に残るのは、三人の日本人

伝道者がはたして日本基督伝道会社から派遣されて来たのか、それについてははっきりとした根拠をもっていつているのかどうかであるが、この問題については後述したい。

ギューリックは二月八日にホノルルを発ち、サンフランシスコに向かう²⁸。その後、パークレーで日本のキリスト教について講演をした後、シカゴに向かう²⁹。ギューリックはシカゴからクラークに対して、再びハワイの日本人伝道の重要性を訴える。すなわち、もし諮問委員会がハワイの日本人伝道よりも日本ミッションを赴任地として選ぶならば喜んでその任につくといひながらも、次の二つの理由でもってハワイの日本人伝道の重要性を訴える。まず、最近の日本人クリスチャンの宣教師に対する批判を思うと、日本伝道の将来に対して悲観的にならざるをえない。それよりむしろハワイの日本人伝道の方が有望である。次に、ハワイが太平洋地域におよぼす影響力が以前にも増して強くなりかつ重要になって来たので、ハワイの日本人及びハワイ人への伝道の重要性もまた増してきた。だからクラークと直接、中国、日本、アメリカと密接な関係をもつハワイのフィールドの重要性およびハワイアン・ボードの要求について話したい。それによって諮問委員会は、自分の赴任地を、日本人が大部分を占めしかも農民に伝道する機会を与えてくれるハワイに決めるだろう³⁰。ギューリックはここで二つの事柄をハワイ赴任の材料として示している。まず、日本人クリスチャンの宣教師批判である。これはアメリカン・ボードから日本組合教会が独立自給していかうという大きな流れの中から出て来た問題である³¹。こうした日本ミッション内での日本人クリスチャンと宣教師との対立を、熊本事件においても彼は経験したことである。日本人の宣教師批判によって日本伝道の将来に対して悲観的になり、それがハワイ赴任の材料であるとすれば、ギューリックは熊本事件以降日本人の宣教師批判に対して批判的であり、こうした傾向を「独立自給論」をめぐってますます強めていく日本ミッションの実情、ひいては日本組合教会の

あり方に対して批判的になっており、もはや日本伝道に将来性を見出しえなくなっていたというふうに考えられる。そうした彼の心情に一つの方向性を与えたのはハワイアン・ボードの誘いであり、ハワイの実情であった。それは彼が指摘した第二の材料であるハワイの国際的地位である。ハワイは二月に革命が起きて臨時政府ができ、徐々に共和政体に移っていく時期にあった。ハワイ革命は、ハワイおよびアメリカのクリスチャンにアメリカへの併合とハワイのキリスト教化という希望を与えた。事実、この時期のザ・フレンドやミッションナリーヘルルドを見ると、このような論議がしばしば登場してくる。ギューリックも例にもれずハワイの将来に関心を持ち、ハワイのハワイ人と日本人の中に自分の場を発見したと考えられる。

これに対してクラークは、ギューリックに、諮問委員会の決定ということではなく彼自身の個人的見解として、日本ミッションからギューリックのハワイ赴任についての見解をとりつけるよう提案した。⁸⁸

日本ミッションの反応

クラークの提案に対して、ギューリックは五月二二日付の書簡で、ハワイの日本人伝道を「支部」として位置付けて自分達を援助しない限りハワイに六カ月以上留まる意志はないことをくり返しながら、日本ミッションの宣教師からの声明について報告する。すなわち、ギューリックはすでに去年一二月初旬に日本ミッションに対して、この問題についての問い合わせをしたこと、その返事が日本から今年の三月まで来なかったこと、岡山ステーションのペター (James H. Petter) の手紙と共に送られて来た日本ミッションに属する宣教師達のサイン入りの声明書は、非公式のものであったのでクラークには送らなかつたことを述べる。⁸⁹

では日本ミッションの宣教師はキューリックのハワイ赴任についてどのような反応をしたのだろうか。ここでまず
テーパーから送られてきた手紙およびその声明について述べよう。

これは以下④～⑥。四つは構成が次の通り

④ 声明書

⑤ ステーパーの二月一五日付の注釈書

⑥ デイヴィス (J. D. Davis) の二月二四日付の補足説明

⑦ テーパーからキューリック宛 (一八九二・一一・二六) の手紙

⑧ ④の中味は次のようにな文面である。

We, the undersigned, learned with both pain and pleasure of the invitation extended to Rev. & Mrs. O. H. Gulick, to remain permanently in Hawaii; With pain because of the thought of losing them from our midst and of sparing them from Kyushu and Japan;

With pleasure because we recognize the importance of work for the twenty thousand Japanese already in Hawaii; the mutual gain that would result from closely uniting that work with ours; and the peculiar fitness of these friends for that position. We are glad to leave the decision entirely with Mr. & Mrs. Gulick, but earnestly hope that if they elect to remain in Hawaii, they still may be counted as members of our Mission (corresponding members perhaps) and the work for Japan-ese in that kingdom be considered in some sense an outpost of the Mission and Kumiai work in

Japan.

James H. Pettee [Okayama]

Jerome D. Davis [Kyoto]

George E. Albrecht [Kyoto]

John C. Berry [Kyoto]

M. L. Gordon [Kyoto]

Otis Cary [Kyoto]

Arthur W. Stanford [Kyoto]

Wallace Taylor [Osaka]

Frank N. White [Osaka]

George Allchin [Osaka]

Nellie M. Allchin [Osaka]

Eliza Talcott [Kyoto]

Mary E. Wainwright [Kyoto]

Susan A. Searle [Kobe]

Mary B. Daniels [Osaka]

Elizabeth Torrey [Osaka]

Gertude Cozad [Kobe]

Arthur T. Hill [Kobe]
John T. Gulick [Osaka]
Mary A. Holbrock [Kobe]
Cora A. Stone [Kobe]
John L. Atkinson [Kobe]
Carrie E. Atkinson [Kobe]
Julia A. E. Gulick [Kumamoto]
Julia E. Dudley [Kobe]
Martha J. Barrows [Kobe]
Annie L. Howe [Kobe]
Schuyler S. White [Okayama]
Nina C. Stewart [Okayama]
Ida A. White [Okayama]
Danniel C. Greene [Tokyo]
John H. Deforest [Sendai]
Annie H. Bradshaw [Sendai]
William W. Curtis [Sendai] §

Unless Mr. and Mrs. Gulick have requested the opinion of the Mission, Sendai Station objects to

the sending of this document-it looks too much like voting folly out of the Mission.

この声明の性格を知るために⑥から⑩をつなぎ合わせて、声明書作成の経緯を追ってみよう。ギューリックのハワイ赴任について、クラークから日本ミッションにその意向を尋ねて来た。一方ギューリックからも、一二月初旬に「今や決定はアメリカン・ボードと日本ミッションしだいである」と書いた同趣旨の手紙が日本ミッションに届いた↑④。そこでペターがこの声明を作成し、極めて短期間に回せる限りの宣教師に回覧してサインを求めた。結局時間不足で、熊本、鳥取、松山、前橋、新潟などのステーションには回せなかった↑⑥。この声明について仙台ステーションの特にデフォレストから、声明は日本ミッションとしての決定ではないので本部に送ることに反対するという批判があった。そこでグリーンが彼らを説得するために仙台へ行った。しかし、仙台のような反応は極めて特殊なものであるから、気にしないで欲しい。彼らもきつとわかってくれる。いずれにしても、自分たち有志としては、ギューリックに日本に帰って来てもらいたいが、ハワイの重要性はよくわかるのでこの声明ができたことを喜んでいる↑⑩。

ここでひっかかって来るのは、デフォレストはその後のこの声明をボストンに送ることにたして同意したのかどうか、また今回の回覧にもれたステーションに対してどのようにギューリックの件を伝えたのか、各ステーションの反応はどうだったのかである。残念ながらこれらの問いに答えてくれる資料は今の所ない。となると言いうることは、この声明は神戸、大阪、京都、岡山その他三〇四人の人々の考えであるということである。ちなみに、一八九三年のアメリカン・ボードの年会記録によると、当時日本ミッションには二四人の宣教師と五六人の女性のアシスタント宣教師がいたと報告されている⁸⁶。総計すると八一人、そのうちサインをしたのは(仙台的三人を除く)三一人であるの

で、三八％位の人々が賛成したことになる。これでは作成者がいつているように非公式以外の何ものでもない。サインをした者が関西にかたまってしまったのは、ペター（岡山）が短期間に回せる範囲を示していると思えるが、なぜ仙台からの三人の名がはいったのかは不明である。

さて、この三八％の宣教師たちがどのような声明に同意したのかというと、単純明快、ギューリックの意向に沿って、ハワイの日本人伝道を日本ミッシェンおよび組合教会の伝道の出先地として認めたのである。またギューリックの赴任地を、日本ミッシェンに留めたままでハワイへの日本人伝道に従事することを認めたのである。この声明内容は画期的である。一八九二年に岡部が日本に寄ったことが、どの程度日本在住の宣教師に影響を及ぼしたのか確かめられないが、少なくとも組合教会の議事録（一八九一三年）にはハワイ伝道のことを議題にまであがって審議された形跡はない。⁽⁴⁷⁾ そうした中において、ハワイ伝道を組合教会伝道の出先地として位置付けることは宣教師たちのギューリックに対する単なる友情だったのか、それともそれ以上の考えに基づいていたのかはわからないが、彼らはかなり独断的に自分達のテリトリーをこれによって新しく得たことになる。

ギューリックの使命感とアメリカン・ボードの決定

ギューリック夫妻はその後、五月三〇日にオービリンに行き⁽⁴⁸⁾ 六月四日にクリフトン・スプリングス（Clifton Springs）で開催された国際宣教師大会（International Missionary Union）に出席する。この頃になって来る⁽⁴⁹⁾ ハワイも共和政体確立に向けて歩み始め出すし、またハワイの地理的な重要性が高まるという外的な条件もあってギューリックのハワイへの思いはつもの一方であった。クラーク宛の書簡（一八九三・八・二三）では、ハワイは今や

過渡期を迎え、ヨーロッパ人、ハワイ人、日本人という重要な三種の人種は、社会的、教育的、宗教的に大きな変化を余儀なくされている。こうした中であって、自分の役割は、日本語、ハワイ語ができるという強味を生かして三人種に感化を与えることである。J・デイヴィスの言葉を借りると、自分こそは三種のクリスチャンをつなぐことができる唯一の人物である。だからもし可能ならば、ハワイを永遠の赴任地として認め、援助して欲しいと訴える。彼のように考えれば、革命以降の様々な改革がいかに三人種に大きな影響をおよぼしているかを示している。それだけに彼は自分にしか成し得ない責務として、こうした政変の中にあつてあえてキリスト教による三人種的一致をハワイに実現していこうという重大な決意をするようかりたてられたのである。

ギューリックは八月二九日からシカゴに行き、(一八九四年)一月四日にバークレーにもどり、そして一月二七日に再びホノルルに到着する。³⁹この時は、ハイド、ビンガム、ピシヨップ、デーモン、岡部らの歓迎をうけた。一八九四年といえば、共和政府が七月の共和国成立に向けて内部がためをやっている時期であり、またリリオカラニ君主制を支持する人々には不満をつのらせている時期である。日本人にとっては、三月に外国人上陸条令が出るという厳しい状況である。日本人伝道の上では、メソジスト教会が再び日本人への伝道を開始し、岡部をはじめとしてハワイアン・ボードに属する伝道者達は頭を悩ませていた。岡部は一八九三年五月二五日に、ホノルルで日本人伝道について対策会議を開き、日本人伝道を統轄する伝道部長をおくことを含む三つの決議を行なっている。岡部にとってはギューリックの到来は願ったりかなったりではなかったか。その証拠に、岡部は一八九四年二月二三日の『基督教新聞』で、ギューリックの到来によって「布哇国に於ける大和民族間の伝道は甚だ好運に向へりと云ふべし」と述べている。一方ギューリックはどうしていたかという点、ホノルルに到着してから各島を巡回し、日本人およびハワイ人への

伝道のため忙しく働いた。⁴⁸ こうした経験を踏まえて、ニューリックはクラークに対して最後の希望を五月三〇日付の書簡で訴える。すなわちもし自分がハワイに留まれるのなら、日本人伝道者達に道徳的、精神的な援助をしたい。あくまでも将来の赴任地については諮問委員会にその決定をゆだねるが、ハワイは契約移民の大部分を占めている「貧しい、無知」な日本人農民に伝道するには日本以上に適していると述べてハワイ赴任への決意を表明すると共に、ハワイアン・ボードの主な人々に対して自分をハワイに留めるようにクラークがスマイスに手紙を書いてくれるよう頼んだ旨知らせている。⁴⁹ 彼はここでハワイ赴任への抱負を語っている。すなわちまず日本人伝道者の精神的・道徳的な援助者になりたいという。つまり日本人伝道を指揮監督し彼らの相談相手になる、いわゆるスーパーバイザーになるということであろう。この考えは岡部の願いに近いものである。次に、農民に対する伝道に力を入れたいという。これは移民労働者が主な伝道対象であることからして当然そうなる。また仏教その他の妨害のないハワイは日本以上に農民伝道に適しているといえる。

こうしたニューリック夫妻の切なる願いに対してアメリカン・ボードはどのような対応をしたのか。クラークはニューリック宛の書簡（一八九四・六・二三）で、ハワイからニューリックを当地に留めるよう要求する手紙が数通来たこと。この件について次の諮問委員会で話し合うこと。また委員会としての決定はでないが、ハワイおよび日本の両方の状況にかんがみて今のところさしあたって問題がない、むしろ “It will be your duty and privilege to remain in your present labor (in Hawaii)” であると述べる。これは一種の内諾書である。

こうしてニューリック夫妻の申出、ハワイアン・ボードの努力、そして日本ミッシヨンの理解ある対応は、アメリカン・ボードから出された六月二日付けの手紙によって結着するのであった。手紙は内容的にほぼ同じであり、一

通はクラークからギュリック宛、もう一通はスミスからハワイアン・ボード宛に出された。ここでは本人宛の手紙の内容をみていきたい。⁽⁴⁴⁾

The Committee, therefore, assent to your remaining in the Islands, while still formally connected with the Japan mission, - to make the Hawaiian Islands a sort of station of the Japan mission, - as your wife tersely puts it. This is with the understanding that you labor among both peoples, Japanese and Hawaiians, as you have opportunity. We will keep your name on the list of Japan missionaries, for the present located in the Hawaiian Islands. No definite time was stated, but that matter is left to what may develop in the future. For the present at least we will count you in as located at the Hawaiian Islands while remaining in connection with our Japan mission. This arrangement I think is in accordance with your wishes and will meet the wishes of all classes in the Islands.

つまり諮問委員会はギュリックの希望を受け入れ、ハワイ伝道を日本ミッションの一種のステーションと位置付け彼の名前を日本ミッションに置いておくこと、ハワイでは日本人及びハワイ人双方のために働き期限は特に指定しないことなどを決定した。⁽⁴⁵⁾ ギュリックはこの決定を受けて、一八九五年度の給料として千八百ドルをハワイアン・ボードの会計に要求し、承諾された。⁽⁴⁶⁾ また、彼の給料はアメリカン・ボードの会計のワード (Langdon S. Ward) からハワイアン・ボードの会計のホール (W. W. Hall) を通して本人に支払われることになった。⁽⁴⁷⁾

このようにして長い時間をかけてようやく結論に達した日本ミッション「支部」としてのハワイ伝道は、当時の社会的状況の中でどんな意味を持つのかも一度まとめてみたい。

まず、ハワイアン・ボードおよび岡部達は年々増加していく日本人への伝道対策に頭を痛めていた。特にメソジスト教会の伝道再開はダブルパンチであった。岡部にはギュリックは日本人伝道部長にふさわしい人物として映った

であろう。ハワイアン・ボードとしても、日本伝道の経験があり、日本語ができ、しかもハワイの内状にも通じている人物というすべての条件を兼ねそなえたギュエリックに是非とどまってもらいたかった。だからといってアメリカン・ボードはそうやすやすとギュエリックを手離さない。

そこで登場するのがギュエリックであった。彼は日本の伝道にある意味で失望し、新しい活路を求めていた。そこに飛びこんできたのがハワイの日本人とハワイ人である。ここなら自分の経験をすべて生かせる。しかもハワイの日本人は日本以上に恵まれた中にあり——仏教からの排斥、親族からの反対がない——日本ではできない新しくて広大なフィールド——農民——への伝道がなしよう。ハワイ革命は彼のそうした気持ちに拍車をかけた。ハワイ王政の崩壊によってハワイはますますアメリカに近くなり、キリスト教化＝文明化を実現し易くなってきた。ギュエリックは今こそハワイの三大人種はこの好機を利用して、キリスト教によって手をつなぐべきである。そのことによってハワイをキリスト教的文明国にするのだと決心し、そこに自分のやるべき使命感を見出し出した。

この確信と使命感を現実のものとするべく打ち出したギュエリックのアイデアは、日本ミッションに所属しながら——アメリカン・ボードの要求、ハワイで伝道をする——ハワイアン・ボードの要求——という方法である。しかも財源はアメリカン・ボードからしか期待できないことは当初からはっきりしていたから、必然的にアメリカン・ボードの日本ミッション「支部」ということになる。

しかし日本ミッション「支部」という位置付けは実際には多くの問題をかかえていた。端的に言うとならハワイ政府と日本人とのほごまに立たされるということである。この「支部」のかかえる問題がいったいどのような形で出てくるのか、それに対してギュエリックはどのような取り組みをしたのかを以下二つの事柄に焦点をあててみていきたい。

二 ハワイのアメリカへの合併と日本人

(一) ハワイ革命

ハワイ政府と日本人とはさまに立たされるといふことが最も顕著な形で現われてくるのはハワイの政治舞台である。すなわち、一方でキリスト教文明を唱えつつ、もう一方で日本人およびハワイ人を排斥していくという行為である。こうした問題に直面してギューリックがどのような対応をしたのか以下みていきたい。

一八九三年一月にハワイ革命がおこり、リリオカラニの君主体制が終わりを告げ、代わって臨時政府が確立された。臨時政府はただちにアメリカとの合併を実行に移そうとしたが、事柄はそうスムーズに運ばなかった。

ギューリックはハワイでこの歴史的瞬間に遭遇した。彼はクラーク宛の書簡(一八九四・一・三一)でこの事件についての感想を述べる。すなわち、リリオカラニの失政にかんがみてハワイの君主制が倒れたのは当然である。この政変の立役者はアメリカの教会と宣教師である。両者の努力によってハワイは異教から解放され、世界の国々の中にその場を得ることができた。問題はハワイとアメリカとの合同である。つまりアメリカはハワイを州、領土、または独立政府としてそのまま維持、支援していく意志があるのかどうかである。もしアメリカがハワイを保護国にしなかつたらイギリスがそうするだろう。また、もしアメリカがハワイを合併する気があるのなら、アメリカは本土のアフリカ人やインディアン(ネイティブ)と共にハワイ人の市民権、参政権を認めてくれるのかどうか。ハワイは、一八九〇年の統計では数カ国語(アメリカ・ドイツ・ポルトガル・ノルウェー・中国・ポリネシア・ハワイ・日本・その他)を語る人々をかかえているが、三分の一のハワイ人は英語を話し、今や大部分の子供達は学校で、*great con-*

ning language”を学んでいる。驚くべきことは、大半のポルトガル人、中国人、日本人もこの世界にいきわたった商業言語を使って商売をしているということである。このように、ギューリックはハワイ王朝の終わりを喜び、その背後で働いた宣教師達の努力を高く評価すると共に、ハワイのアメリカへの合併の可能性を追求している。ここには、ハワイ革命によってようやくハワイにキリスト教文明国への道が開けた。その道はアメリカとの合併によって実現する。今こそアメリカはハワイを合併すべきである。ハワイにはすでに宣教師によってキリスト教文明国民にふさわしい資質をもち、英語をも話しているという未来への明るい展望が感じられる。それと同時に、ハワイをここまでにしたのは自分たち宣教師であるという自負心も感じられる。

ギューリックのこうした合併への思いは、四月八日に書いた“Is Hawaii to be Annexed”を見るともっとはっきり出てくる。この文章はクラークに頼んでミッションナリー・ヘラルドか何かの書物に載せてもらおうと思っ
て書いたものである。⁶⁴⁸その内容を要約すると、ハワイとアメリカの合併について言うのは簡単であるが、実行するのは時間がかかる。もしアメリカがハワイを獲得することによってメリットを感じるならば合併する。ではどんな合併に付随するメリットがあるのか。今日ハワイを保持する者は北太平洋の商業を握る鍵を持つことになる。次にハワイ人について、ハワイ人は奴隷であり決して文明国の一員になれないという議論は間違っている。識字率も高いし、道徳観もある。最後に、それゆえアメリカがハワイを合併しないのならきつと他の国がそうすると述べ、ハワイのアメリカへの合併の必要性を強調する。

これらから明らかなように、ギューリックは革命を支持し、アメリカとの合併を希望した。こうした考え方の背後にはハワイをキリスト教アメリカ文明によって高めようという、当時のアメリカのクリスチャン特有の使命感(Ma-

rightest Destiny)があつたことは否定できない。こうした考え方は共和国への対応にも影響を及ぼすであろう。

(二) 共和国支持

ギューリックは共和国に対しても、全てを賛成しているわけではないにしても、安定したよりよいハワイの政府をつくっていくための展望がひらけたと評価する。⁽⁴⁾

その後共和国政府は憲法を作成し、その憲法を制定するための国民代表を選ぶ会議を開いた。この憲法はハワイ人へ参政権を拡大したものの、「共和国政府を支持する者」という限定を設けたため、ハワイ人の中の多くはこれを支持しなかつた。またこの憲法ではアジア人の参政権は全く認められていなかった。結局憲法は国民投票にかけられることなく、少数の代表者によって承認された。⁽⁵⁾ギューリックはこの代表者選挙について、ここで選ばれた人々が正当な代表であり、彼らがつくった憲法は、永遠に栄える、正当な、平和な政府の核となるであろうと高く評価している。⁽⁶⁾そうして、こうした政治体制の中にあつて自分の務めは、エマーソンやハイドと共にハワイ人たちの信仰、希望、靈的生命をささえることであると述べる。⁽⁷⁾

ギューリックはその後クラーク苑の書簡(一九八四・六・一五)で、五月三〇日に出たアメリカ議会の、アメリカはハワイの政権を支持し、いっさいそれに干渉しないという宣言を載せ、これによってハワイ共和国は設立できる好機を迎えたと評価する。

結局、共和国政府は七月四日に設立を宣言する。ギューリックはそれ以降あまり共和政府および合併問題について触れていない。ただ彼が述べていることは、自分はいつでもハワイ人に対する指導と道徳的な援助をおしまないとい

うことである。⁹³この発言は以前にも出てきたものであるが、その意図することは計りかねる。しかし、彼のハワイでの使命が三大人種をキリスト教の下に一つにすることであつたとすれば、共和国の斯矚の下で排斥されていくハワイ人を放っておくことはできなかったであろう。かといって共和国にキリスト教国実現の一ステップを見出している彼にとつて、その共和国を批判するなどということは考えられなかつたであろう。とすれば彼にとつてやれることは、魂の面で共和国とハワイ人との「和解者」になることではなかつたか。

(三) アメリカへの合併と日本人

一八九六年以降より一八九八年八月のハワイのアメリカとの合併まで、合併問題に関して活発な議論が戦わされているが、ギューリックは合併問題について具体的な言及をしていない。しかし考えられ得ることは、彼はキリスト教文明の下に高められているはずのハワイと、ハワイ人や日本人を排斥するハワイとのはざまにあつて苦しんだと思う。こうした中で、ギューリックはハワイ赴任前に考えた三大人種のキリストによる一致を、あまりにもかけはなれた現実の中でどのように実現しようとしたのか、又できなかったのか。

一八九六年以降の合併についての議論を、ザ・フレンドの中からとり出し、その論調の特色をあげると次のようになる。⁹⁴

④ ハワイは白人種が支配すべきであり、宣教師達が長年にわたつてつちかつてきた西欧文明を、アジア系、特に日本人の脅威から守るべきである。

⑤ 今日の国際的に緊張した情勢の下で、ハワイ人はハワイの独立を維持するだけの能力をもっていない。

◎ハワイは太平洋岸の防衛、商業上極めて重要な位置をもっており、放っておくと日本に乗つとられて日本の植民地になってしまう。

①ハワイの独立などはまやかしてである。太平洋におけるアングロ・サクソン人種の利害にかんがみると、アメリカのみがハワイにふさわしい持ち主である。

こうした白人種の優越感⁹⁵は日清戦争に戦勝した日本への評価にもみられる。すなわち日本が勝てたのは中国よりも早く西洋文明をとり入れたからであるというとき、明らかに西洋文明＝高度な文明という図式がみえる。白人種の文明によるハワイ支配は、ハワイのクリスチャンだけが持った例外的な見方⁹⁶ということではなく、前述したように十九世紀のアメリカのプロテスタントがもつ、アングロ・サクソンのプロテスタント文明による世界化という世界観の一例にすぎない。もちろん、ギューリックも同時代の人間として同じような考え方を継承していたし、それは共和国支持、合併推進の中にある程度反映していると考えられる。しかしギューリックはハワイの政治的变化の中でその矛盾を見た。

こと日本人に限って考えると、こうした白人優先の世界観と相矛盾しており、ハワイ政府は現実の政策として日本人の排斥を始めた。こうした中であつて、ザ・フレンド（一八九四・四）は日本人による参政権回復運動に触れ、日本人が有権者になることはあり得ないと言いつつ、また、日本人上陸拒否事件についての日本政府の抗議をハワイ政府がねつけたことに対しては、ハワイ政府はようやくハワイが日本人に占領されてしまう動向に対して積極的な対応を示したと評価する⁹⁷。

ギューリックはこうした諸矛盾をかかえつつも日本人への精神的、道徳的支援者としてどのように対応したのか。

日本人入国拒否事件が起つた時、奥村多喜衛、木原外七、小林卯之助、川崎喜代蔵らが、一八九七年三月一日付で佐倉丸の上陸を拒否されて隔離された日本人のための義捐金募集を行ったことはすでに知られている。⁹⁷一方、組合系ではないにしても、ハリスと木原は佐倉丸で上陸を拒否されて隔離所にはいつている日本人の所に慰問に行つて⁹⁸る。

ではニューリックはどうであつたか。それを知る手がかりは極めて少ない。ただ一八九七年六月のハワイアン・ボードの年会で、ニューリックと小谷部全一郎が日本人を弁護して、日本人は隣人愛に欠けるという疑いに對し、ハワイの日本人間にはキリストの愛が満ちておりキリストにある一致は政治的な不和より強いと訴えた。⁹⁹この発言は明らかに日本人上陸拒否事件をめぐつて、ハワイの白人と日本人との間であつれきが生じたので、日本人を弁護する目的でもって発言されたものと考えられる。彼のこの発言をどう理解すべきであろうか。すでに見てきたように、当時のハワイの白人のクリスチャンはハワイの君主制の崩壊を願い、ハワイのアメリカとの合併による白人文明にキリスト教文明の徹底浸透を願つた。そのためには白人文明以外のいわゆる「劣等」な文明は排除されなければならないのであり、特に日本人はハワイ人口に占める割合からいっても、またその背後にある日本の合併問題に及ぼす力からいってもハワイの白人支配及びアメリカとの合併に脅威となるので排除されなければならない。ニューリックも例外ではなく、白人政權の誕生およびアメリカへの合併を願つてゐた。しかし彼の立場は、アメリカン・ボードからハワイ伝道に任命されたのではなく、日本ミッシヨンのハワイ「支部」に任命されたのである。彼はハワイ生れの白人クリスチャンとしてハワイのキリスト教文明化及び白人支配を願いつつ、その線上に排斥されている日本人をも支援するといふ微妙な立場にいた。彼はむしろハワイの政治的激變の中にあつてハワイの三大人種をキリスト教の下に一致

させ、また日本人伝道者の精神的・道徳的支援者「和解者」になるといふ使命感をもってハワイの日本人伝道を志したのである。そのギューリックがなし得ることは、政治的にはハワイのキリスト教文明化すなわち白人支配を願うこととした政治論議から排除されていく日本人をその精神的・道徳的支援者として弁護し、究極的な三大人種のキリスト教による一致を目指して日本人のキリスト教化に励むしかなかったのではないか。それを裏付けるようにハワイアン・ボードの『年会記録』(二八九六年)で彼はこう述べている。すなわち、ハワイの文明は全体としてアメリカ的であり、商業はアメリカ人とヨーロッパ人によって占められている一方で、日本人は若い共和国の下で砂糖やコーヒー栽培を成功させる重要な労働力である。つまり、ハワイは西欧人によって支配されており、その文化はアメリカ文化である。日本人はその白人支配、アメリカ文化を支える労働力であるというのである。ここにはハワイにおける各人種の役割がはっきりと示されている。またハワイアン・ボードの『年会記録』(二八九八年)では、彼はこう述べる。中国人やハワイ人と違って、日本人はハワイの将来の支配のために我々(白人?)が扱わねばならない重要な対象になるうとしている。ここで問題なのは、いかに日本人を扱うかであるが、これを純粋に政治的な見地から考えるとすれば答えはむずかしい。ただキリスト教的な見地に立つときのみ解決法がでてくる。

このように見てくると、日本ミッション「支部」にあつてギューリックが果たすべき役割がわかつてくる。それは政治的にはハワイの白人支配、キリスト教文明を支援し、その徹底化としてのアメリカへの合併を願うこと、ひいては白人支配を固定化するために日本人を排除していこうとするハワイの現状を容認することである。ギューリックの日本人に対する責務はむしろ、キリスト教国たるべきハワイと現実の日本人排斥政策とのはざまにあつて「和解者」として日本人クリスチャンの精神的・道徳的支援者となり、弁護者となりつつ、日本人のキリスト教文明化による三

大人種のキリスト教による一致を目指して努力することであった。そのための条件は日本以上にそろっていたのである。ではギューリックはどのような伝道事業を行なったのだろうか。

三 日本ミッション支部

(一) 日本ミッションとハワイ伝道

ギューリックは前述したようにハワイに日本以上の大きなフィールドを見出し、ハワイは日本以上にすばらしい伝道地であると言った。彼がハワイに見出したすばらしいフィールドとは具体的には耕地で働く農民であった。では彼は日本ミッション「支部」としてどのように日本とつながっていたのか、また日本ミッションはハワイの日本人伝道とどのようにつながっていたのだろうか。

ここでまず考えたいことは、日本伝道とハワイ伝道がどのようにつながっていたのかということである。ギューリックはハワイの日本人伝道を日本ミッションの「支部」として位置付けた理由の一つとして日本人伝道者が直接日本の教会や京都のトレーニングスクールから来ていることをあげ、又別の所で、奥、江上、高森が組合伝道会社（日本基督伝道会社）から選ばれて来ていることを指摘している。⑧はたしてハワイ伝道と組合教会、同志社ほどのようにつながっているのだろうか。組合教会及び日本基督伝道会社とのつながりについてはすでに杉井氏が指摘しているように、ことハワイ伝道が議題にあがったことは一度もなかった。⑨

次に同志社とのつながりの点ではすでに飯田氏によって明らかのように、かなりの数の同志社出身者がハワイ伝道

にかかわっている。ここで問題なのは誰がそのパイプ役になったのかということである。今までの調査でそのパイプ役として有力視されているのは岡部次郎である。確かに岡部は日本に帰国した際、各地でハワイ伝道の必要を訴えたであろうし、奥村多喜衛などは岡部の同志社における講演がきっかけになってハワイ行きを決心したと語っていることはよく知られている。しかし岡部はハワイにいるわけだからおのずとその活動には限界があるのではないか。では誰か他に日本とハワイをつないだ人物がいるのではないか。

ここで特に考えたいのは、日本ミッシヨンの支部との関係で在日アメリカン・ボード宣教師である。

まず指摘すべきは、同志社のJ・D・デイヴィスである。江上源三と高森貞太郎がハワイ伝道に赴任する際、ハワイアン・ボードにそのことを知らせたのはデイヴィスであり、二人がデイヴィスの紹介で来たことはエマーソンの書簡によって明らかである。もちろん岡部も二人がデイヴィスを通じて来ることは知っていた。ここで気になるのは岡部がこのことをいつ知ったかということである。岡部の書簡によると、デイヴィスが二人がハワイに来ることを知らせる（九月二十七日の書簡）より前に、岡部は二人がハワイに来ることを知っていたことがわかる。岡部は二人が来ることをどのようにして知ったかはわからないが、推測ではあるが、彼が日本に帰って同志社を訪れたときにデイヴィスに会い、ハワイ伝道に関する話しをしたので早くからその事を知っていたのではないか。

デイヴィスがハワイに紹介した人物は二人だけではない。ギュリックの書簡（一八九四・五・三〇）によると、六月中にデイヴィスの紹介でハワイに二人来るとある。残念ながら名前はでていないが、この時期にハワイに来ていたのは山崎直（六月）、奥村多喜衛（八月）の二人であるから彼らがデイヴィスの紹介で来た可能性が強い。山崎については調べきれていないが、奥村については「私は同志社神学校に於ける私の先生デビス博士が帰米の途次布哇に立

寄り伝道会社の交渉の上招いてもらったのである」といつているし、確かにデイヴィスはデフォレストと共に六月一日にホノルルに立ち寄っており、この時ギュリックに二人のことを知らせた可能性はある。

その他の日本人伝道者がデイヴィスとどのようにつながっていたのか今の所明らかでない。ここで興味深いのはギュリックの姿勢である。彼はデイヴィスをかなりあてにしていたようである。デイヴィスが同志社にいて、学生をハワイに送りやすい立場にいたことからして当然考え得ることである。例えば一八九九年に江上がウィルクを辞任した際、彼はコハラの神田重英を後任にしようとした。しかしそうなるとコハラの後任をどうするかという問題がでてくる。彼はこの件について書簡(一八九九・七・二八)で“*How the Kohala station is to be filled-I can not see unless Dr. Davis shall send us some more evangelist*”と述べている。もっと顕著なのは一八九九年に日本から伝道者が一人も来なかったことを評して、彼は“*our agent*”であるデイヴィスによって熱心に伝道者を捜してもらったが一人も来なかったと感想を述べている。これらからもわかるように、少なくともギュリックはハワイの日本人伝道のための伝道者をデイヴィスを通して得ようとしていた可能性が強い。

その他宣教師の紹介でハワイに赴任して来た人物として、上田周太郎がM・L・ゴードンの、神田重英がS・ギュリックの、宗栄子がO・H・ギュリックの紹介である。

以上見てきたように、ギュリックの日本ミッション「支部」としてのハワイ伝道はその伝道者を重にデイヴィスを通して、そして少数ではあるが日本ミッションに属する個人的なつながりなどを通して得ようとしていたことが予想できる。

次に問題になってくるのはギュエリックの日本伝道とハワイ伝道とのかわりである。この問題をみていくにあたって「熊本」が極めて大きな位置を占めていることを最初にいつておきたい。

まず、熊本事件によって熊本英学校を解雇された奥村楨次郎（江口一民）が、一八九三年に伝道者としてハワイに渡ったことは知られている。江口がハワイに来る際にギュエリックが多少の係わりをもったかどうかかわからないが、マカウエリ赴任の際には係わっている。すなわち、一八九四年四月にギュエリックはエマーソンと共にマカウエリの耕地に行き、耕地支配人のモリソン（Morrison）と社長ボードウィン（Baldwin）に頼んで、この耕地の日本人のために働く日本人伝道者を雇い、そのために全面的な援助をする約束をとりつけた。そうして伝道者選定に際してはマカウエリの日本人労働者千人がほとんど熊本出身であるため、同じ熊本出身の江口一民が赴任したが、その時ギュエリックが決定に関与したことは疑い得ない。

ギュエリックのハワイ赴任の原因の一つに日本での宣教師批判があったことは前述したが、彼が江口に対してこうした行動をとった背後に、熊本事件によって解雇された江口への同情と、それ以後強まった宣教師批判に対する憤りがあったことは察することができる。

こうした思いは日本組合教会のアメリカン・ボードからの独立自給論議と共に派生する宣教師批判に対するギュエリックの反応、すなわち日本伝道に対する絶望感とハワイ伝道への使命感という結論にまで至る。彼の日本組合教会への思いは、クラーク宛の書簡（一八九四・五・三〇）の中にこのように述べられている。すなわち、熊本バンドの圧倒的な影響力から解放されたこれらの若い（日本人）伝道者達によって日本人伝道はよい成果を生むと評している。これはギュエリックの卒直な感想に違いない。彼は熊本バンドを中心にした日本組合教会の影響が及ばないこのハワ

いで、若い日本人伝道者と共に新しい伝道地をつくりたかつたのではないか。

つまりギューリックは熊本バンドを中心にした日本組合教会の影響を受けずにいわゆるミッション付属のステーションをハワイに新しくつくろうとしていたといえよう。

(二) 耕地農民の教化

ギューリックはハワイの日本人農民への伝道に日本以上の可能性を見い出した。つまり耕地で働く農民に伝道の可能性を発見したのである。では彼はどのような耕地伝道を試みたのか、その目的が何にあったのかを見ていきたい。

耕地の日本人への伝道が労働者管理に極めて有効であることは、すでに美山貫一の耕地伝道の成果によって早くから言われていることであつた。⁽⁹⁾ギューリックがハワイに赴任した頃には岡部次郎が耕地を巡廻し、各地で耕地の支配人に会い、キリスト教がいかによい労働者をつくるかを説いて伝道者への援助を訴えていた。⁽¹⁰⁾伝道の財源確保は重大な問題であり、ハワイアン・ボードの財源に限界がある以上不足分を補充するためには耕地の支配人からの援助が必要だつた。岡部もその問題に苦しんだが、彼の報告をみる限り各地で着々と成果があがっていた。一八九四年の年会報告では次のようになっている。⁽¹¹⁾

ホノム(峰岸)——耕地の支配人が日本人のために図書館。

コハラ(神田)——耕地からの援助。

パイコウ(佐々倉)、パハラ——伝道者への援助を耕地が約束。

パイヤ、ハマクアポコ(江上)——パイヤ外人教会と耕地より援助。

マカウエリ——江口に耕地から援助することを約束。

ケアリア——耕地が伝道者援助を約束。

しかしどの程度の援助であったか具体的なことは残念ながらわからない。

ギュリックも岡部と同じ問題をかかえていた。彼はクラーク宛書簡（一八九四・五・三〇）の中で、日本人伝道者の大半が耕地からの援助を受けていることと、もっとたくさん伝道者が欲しいが財源がないことをのべている。

こうした財源不足という難題をかかえつつも日本人伝道者の努力によって成果があがっていった。その成果を知るための材料として、ここでは二つの資料をみていきたい。

まず、島村総領事が耕地を巡廻して、キリスト教伝道者がいる地域とない地域とで耕地のようすが著しく違うことを報告している。そうして彼はハワイアン・ボードにもっと日本人への伝道を推進してくれるように、そしてすべての日本人に伝道者が行き渡るようにと述べる。^①

次に、一八九八年の『年会報告』で、耕主が、伝道者の活動は自分たちが経営している事業のために行っていることと信じていること、また耕主から日本人伝道者への援助があるためにハワイアン・ボードの会計が助かっていることを報じ、以下の耕地名を支援耕地（伝道者）としてあげている。^②

マカウエリ（茂原茂）、エワ（神宮茂八）、パイヤ、ハマクアポコ（小谷部全一郎）、ハラワ、コハラ（神田重英）、ユニオンミル、
 ハワイ、パバコウ（佐々倉代七郎）、ノースヒロ

これら二つによって不十分ながら日本人伝道者による耕地伝道が労働者管理の上で効果があったこと、またそれ故に耕主から援助を受けていたことが推測できる。

ではこうした耕地労働への伝道の成果に対してギュリックはどのような反応を示しているのだろうか。前掲の島

村総領事の日本人伝道師の活動に対する絶賛記事には編集者の論評がついている。それには、島村氏の評価は日本人同胞を教化向上させるために行なった日本人伝道者の活動成果を正しく評価しうる人物によるものであると規定した上で、彼の評価によって日本人伝道者の活動成果が証明されてうれしいと述べている。ここでいう編集者というのはギューリックのことである。とすれば彼は日本人伝道者が日本人農民を教化向上させていること、耕地の労務管理に貢献していることに満足していたということになる。

表1

	山口	広島	熊本	大阪	福岡	宮城	東京	その他	無	合計
1896	7	3		3	1	1		2	8	25
1897	10	3		4				2	16	35
1898	7		1		1	1	1	1	17	29
1899	8		5	1	2		1	0	2	19
1900	7	4	5		4			2	5	27
合計	39	10	11	8	8	2	2	7	48	135

(注)「無」というのは県の記入のない人々のこと。

ところで、ギューリックの伝道活動によって入信した日本人達はどのような特色をもっているのかという問題は今後解明すべき課題である。ここではその課題を解明するために役立つ資料を提示し、考える糸口をつかみたい。

ここに示す統計表(表1)は、ホノルルにある日本人教会(現在のヌアヌ組合教会)の会員名簿写し(原簿はみつからない)より、ギューリックが直接授洗した日本人のみを抜き出してつくった(ヌアヌ組合教会所蔵)。

ここから明らかなように、いわゆる移民県(山口・広島・福岡・熊本)が圧倒的に多い。ここで大阪出身者がかなりいるのは興味深いが、その理由は家族で入信したケースが二つあったからである(三人及び四人一組)。これら入信者達の入信動機、職業、年令等の特色については記述がないので確かめられない。ホノルルにしてこうした傾向がでてくるとすれば、耕地労働者の中での入

信者の場合はホノルルよりもっと顕著な特色がでてくることが予想できる。

このように、ギューリックの日本人農民への伝道は、キリスト教による日本人農民の教化向上に伴う耕主による労働管理の円滑化という傾向をもっていたことが考えられる。ロナルド・タカキ氏は耕地における宗教には三つの役割があるとして、第一に耕主にとっては労働者対策として、第二に伝道者にとっては伝道資金獲得のため、第三に労働者にとっては深い精神的な要求を満たしたり、故郷や古い伝統、習慣を追体験する上で重要であると指摘している。⁽⁸⁾

第三の指摘については今後の研究成果に期待されるが、前者の二点については納得できることではないか。今後の課題の一つである。

(三) 教育事業

ギューリックがハワイに赴任した頃には、日本人社会内ではすでに教育問題と社会問題——風紀問題——は大きな問題であった。⁽⁹⁾ただ一八九四年頃の特徴として顕著なものは、「日本人子弟の教育問題」と、いわゆる「醜業婦」の問題であった。一八九四年八月にハワイに來た奥村が『基督教世界』に載せたハワイ通信の中で、この二つの問題を日本人社会がかかえる問題として指摘したことはすでに知られている。⁽¹⁰⁾ギューリックはこうした問題にどのように対応したのだろうか。彼のキリスト教伝道の目的がキリスト教文明を日本人に伝え、教化向上させるものであるとすれば、当然何らかの試みがあるはずである。

ここでは二つの問題のうち特に「子弟」教育について述べ、「醜業婦」問題については別稿で論じたい。⁽¹¹⁾

まず幼稚園についてである。日本人による幼稚園は一八九三年六月に奥亀太郎とキャッスル(Castle)などの努力によってクイーン・エンマ・ホールの地階で始められた。⁸⁷この幼稚園は保母として小沢糸子を雇い、日本人有志から必要経費三〇ドルを集めて維持していった。⁸⁸

ギューリックはクラーク宛の書簡(一八九四・五・三〇)の中でホノルルのこの幼稚園についてふれ、日本人への伝道事業の一つとしてひじょうに高く評価する。またギューリック夫人がこの幼稚園のための保母を獲得するため神戸のA・L・ハウに手紙を書くときまでいつている。⁸⁹ギューリック夫妻の幼稚園への関心はホノルルのみにとどまらない。一八九四年八月に二人がパイコウを訪ねた時、ギューリック夫人はヒロの婦人達と協力して佐々倉夫人に月二十五ドルを援助し、幼稚園を始めていた。⁹⁰

このように、ギューリック夫妻は幼稚園を日本人への伝道事業の一つとして有望視している。クラーク宛の書簡(一八九五・一・三〇)では、幼児教育はクリスチャンの事業の中で最も価値あるものであるとまで述べている。

次に小学校に移ろう。ギューリックがハワイに赴任した頃、最も日本人児童教育のために著しい活動をしたのは奥村多喜衛である。奥村はホノルルに日本人有志と協力して一八九六年に小学校を設立した。⁹¹その設立の動機は、多種社会の中で育っていく日本人児童は放っておくと、母国語、習慣、伝統を忘れてしまうので、小学校をつくって日本語を教育するということであった。⁹²ちなみに一八九五年一〇月の調査では、当時四才前後の日本人人口は四百人、学齢期のもは約百人いたという。⁹³この小学校は一八九六年四月一三日にエンマ・ホール幼稚園の構内に設立され、教師として桑原秀雄が雇い入れられた。⁹⁴小学校の経営は前述したように有志の寄付によってまかなわれ、「日本人小学校報告」によると、星野栄太郎、渡辺勘十郎、岩上金次郎、高橋正次郎、三田村敏行、今西兼二、古川吉太郎、

毛利伊賀、小島春庵、漆畑治左エ門、石村市五郎、小沢健二郎、内田夫人、星野夫人の名が寄付者としてあげられている。なお、ザ・フレンド（一八九七・三）によると、奥村がキクイ街の敷地でアフタヌーン・スクールを始め、生徒は三十五人いる。大半は幼稚園の卒業生で、午前中は現地の公立学校で英語を勉強しているとある。この小学校の実体はまだ十分にかみ得ていないが、日本の小学校をハワイにもって来たようなものであったことはすでに知られている。⁹⁸⁾

表2

設立者	場所	掲載場所	内容
奥 亀太郎	ホノルル	『年会記録』（九三）	六月・エンマホールで幼稚園開始
佐々倉夫人	パパイコウ	ギューリック（九四・一〇・一九）	幼稚園開始
奥村 多喜衛	ホノルル	『やまと』（九六・四・三〇）	小学校開始
神田 重英	コハラ	『やまと』（九六・一一・一二）	有志と共に小学校の計画あり
曾我部 四郎	ホノム	『やまと』（九六・一二・二四）	小学校、幼稚園をつくることになる
小谷部 全一郎	ハマクアポヤ	『フレンド』（九七・三）	幼稚園の計画あり
上田 夫人	ヒロ	『フレンド』（九七・九）	子供のためのクラスあり
茂原 夫人	ワイメア	『基督教新聞』（九七・一一・五）	子供の教育をする
峰岸 夫人	ケアウ	『フレンド』（九八・四）	幼稚園開始

こうした日本人「子弟」教育のための小学校及び幼稚園設立運動は、ハワイの各耕地の日本人伝道者によって同じ

頃起っている。ここに掲げた表は、一八九八年までの段階で、日本人伝道者によって始められた小学校・幼稚園の一覧(表2)である。

この表によって、いかに「子弟」教育が当時重要な問題であったか、その問題に対していかに日本人伝道者夫妻が熱心に取り組もうとしたのかがわかる。

こうした動きに対してギューリックはどのような評価をしたのか。一八九七年の『年会報告』では奥村の小学校についてふれ、この小学校の特別の目的はキリスト教の感化を維持し、日本語によって子供達を教化することであると述べ、伝道上の有効性について評価している。⁹⁷ また一八九八年の『年会報告』では耕地の「子弟」教育について、各耕地のステーションでは日本人のための学校が伝道者夫妻によって運営されていること。六つのステーションでは日曜学校、幼稚園、子供のための寄宿舎に特別な努力が払われていることを伝えている。またホノルルの小学校の子供達、幼稚園の子供達の上に不断のキリスト教の影響が及ぼされていることを報じている。⁹⁸

このように、ギューリックは日本人伝道者夫妻による幼稚園、小学校教育への努力を高く評価した。こうした努力によって彼のいうキリスト教文明による日本人教化向上のための素地がつくられていったのである。

四 日本人教会の設立

キリスト教伝道は最終的に信仰共同体を組織するところまで来て一つの形ができる。ハワイという多人種多民族国家で信仰共同体の問題を論議する場合、その共同体がキリスト教の理念通り人種民族を超えたものなのか、それとも特定の人種民族によるものなのかということが大きな問題になってこよう。

ハワイの日本人の場合はどうかという点、やはり日本人教会の設立、いわゆるエスニック教会の設立の問題は歴史的な課題であった。前述したように、ギューリックは熊本バンドを中心とした日本組合教会のあり方に絶望し、新しい宣教師と日本人クリスチャンとの関係、新しい教会のあり方を求めてハワイに赴任し、日本組合教会とは孤立無縁な日本ミッション・ハワイ支部をつくらうとしたことが考えられる。当然ここで次に考えられることは、ギューリックは日本人の独立教会の形成に対して神経過敏になっていたことであろう。同時に日本人教会設立についての彼の対応は、単に日本人とギューリックの問題におわらず、ハワイのクリスト教伝道全体の問題であるということ、つまり日本人をハワイのクリスト教共同体の一員として認めるのかどうかという問題でもあった。

ハワイの日本人クリスト教史においては、岡部がすでに一八九一年一月一八日、ヒロに日本人教会を外人教会から独立して持ったことは知られている。⁽⁹⁹⁾ここでいう独立教会とは教会堂のことであり、まだ独立自給の議論にまでは至らない。岡部は一八九二年一〇月九日に新しい会堂の捧堂式を行なった。新会堂建設の費用九百ドルを日本人のみの力で集めたという。⁽¹⁰⁰⁾

こうした日本人教会の建設への動きは各地にみられる。次に掲げる表3は一八九八年までの日本人教会建設の一覧である。

この表によっていかに日本人伝道者が日本人教会を持つことに執着し、努力したかがわかる。特にこの時期に問題となるのは費用をどのように確保するのかということである。日本人労働者に期待しても限度がある。そうなってくる
とハワイアン・ボードか、隣接した教会か、耕主に支援してもらうしか方法がなかったであろう。しかしハワイアン・ボードは伝道者の給料、旅費の面倒はみてくれても会堂建設の費用までは到底無理である。では耕主および隣接教

表3

牧師	場所	掲載資料	内容
岡部次郎	ヒロ	岡部(九二・一〇・一七)	捧堂式
神田重英	コハラ	『やまと』(九六・一一・一二)	一一月二日捧堂式
曾我部四郎	ホノム	『やまと』(九六・一二・二四)	一一月教会新築
奥村多喜衛	ホノルル	『やまと』(九七・六・八)	六月六日捧堂式
佐々倉代七郎	パパイコウ	『基督教新聞』(九七・一〇・一)	八月一日捧堂式
江上源三	ワイルク	『基督教新聞』(九七・一一・五)	九月二日捧堂式
峰岸繁太郎	ケアウ	『フレンド』(九八・四)	教会建築

会などからどの程度の寄付があったのか。残念ながらそれを確かめる資料がない。ただホノムの教会建設にあたっては、耕地から“liberal donation”があったこと、またケアウには外国人からの援助があったことだけが知られる。⁽¹⁰⁾

さて、ギューリックが日本人教会の設立にどう対応したのかを知るために、ホノルルの日本人教会の例をあげたい。ホノルルの日本人教会は一八八七年、メソジスト教会カリフォルニア年会およびハワイアン・ボードの協力の下に、美山貫一によって組織された。その後砂本貞吉が継承し、メソジスト教会総引揚げ後もここにどまった。一八九二一年一二月に砂本は辞任し、奥亀太郎が就任、一八九三年一二月に岡部次郎、一八九五年七月には奥村多喜衛がそれぞれ就任した。⁽¹⁰⁾ その間教会堂はどこにあったかという点、一八八七年にライシウム(Lyceum)で教会が組織され、

九二年一月一日にクイーン・エンマ・ホールに、九三年には再びライシウムに移った。¹⁰⁶

会堂建設への動きは奥の時代に始まる。岡部の「布哇来信」には「奥氏の猶ホノル、府にあるや自ら発起者となり
 広く有志に訴へ日本人基督教会堂新築を企てられしが大に好都合にして実に我が民族中にて一千弗を得たれば進んで
 五千弗を集め直に起工する計画なり」とある。¹⁰⁶この時期、すでに奥はヒロに赴任しており、奥の建設運動がその後ど
 うなったのか、一千ドルはどこに行ったのか報じられていない。ギュー
 リックの書簡（一八九四・四・六）によると、この運動は日本人教会をホ
 ノルルのどの建物にするか選ぶ段階にまでできていたことがわかる。結局
 ライシウムを購入することが決まり、¹⁰⁷そのための募金委員会がギューリ
 ックを中心にして設置され、九六年一月から広範な募金活動が行なわれ
 た。¹⁰⁸その結果は表4の通りであった。¹⁰⁹

これを見ると、外国人たちの寄付は大口の寄付によって占められてい
 る。日本人からの寄付六百八十六ドル三十セントのうち五百四十五ドル
 はホノルルの日本人からの寄付である。その内訳を今示せないが、『や
 まと』に掲載された「日本人教会堂寄金」の第二々四回を見る限り、十
 二ドル五十セント一人、十ドル五人、五ドル八人、四ドル一人、一ドル
 以上四ドル未満四十九人、一ドル未満百三十八人となり、小口ではある
 が広範な寄付者があったことをこれだけからも予想できる。¹¹⁰

表4

収 入	支 出
日本人からの寄付 686.30	土地家屋 8,000—
外国人からの寄付 7,770.35	保 險 16.50
内訳 600 \$ × 1人	修 繕 費 340.15
500 \$ × 8人	図書館への補助 100.—
250 \$ × 6人	
200 \$ × 1人	
150 \$ × 3人	
100 \$ × 8人	
220 \$ 余数人	
合 計 8,456.65	8,456.65

こうして一八九七年六月六日にホノルル日本人教会の捧堂式が行なわれ、当日奥村、小谷部、佐々倉、上田、デーモン、ギューリック、エマーソン、ハイド等が出席した。¹¹¹

さてギューリックはこうした日本人教会建設運動にどう対応したのだろうか。彼はホノルルの日本人教会購入の運動を「日本人を向上させ、キリスト教化させる」ものと位置付け、¹¹²募金活動の中心に立って大きな貢献をした。ギューリックがどんな思いで募金活動をしたのか知り得ないが、少なくとも日本での経験を繰り返したくなかったであろう。特に独立教会に宣教師との不和対立というようにはなりたくなかったであろう。彼はそうした日本の現状に嫌気がさしてハワイに赴任し、新しいステーション——ミッション付属——をつくろうとしたのである。そうした事情を考慮に入れると、彼がなぜ募金活動の中心になり、しかも教会建設に対してほとんど補助しないハワイアン・ボードが募金活動をとりしきり、ハワイアン・ボードの名の下に日本人教会の購入をしたのがわかつてくる。¹¹³つまり日本人クリスチャンがいつか独立教会を建てて自給していくのを止めることはできない。そのことは日本での経験で実証されている。かといってそれによって宣教師と日本人クリスチャンとの関係をくずしたくない。ハワイの日本人伝道を日本ミッション「支部」として——ミッション付属のステーションとして——日本人との関係を悪化させずに続けたい。そのためには教会購入を日本人によってさせるのではなく、ハワイアン・ボードがリーダーシップをとってその名の下に購入する方がよいことになるまいか。ここでは教会購入は日本人とハワイアン・ボードとをつなぐくさびであると同時に支配関係を象徴するものという意味をもつのではないか。

ギューリックは日本人教会の現状を書簡（一八九七・一一・一七）で次のようにのべる。今の時点で五つの日本人教会または集会のための家屋があり、日本人及び友人達によって援助をうけている。ホノルルの教会はハワイアン・ボ

ードの名の下に購入された。日本人伝道のフィールドはすばらしい。なぜならハワイの日本人は日本にあるような様々な迫害から解放されている。また現地のクリスチャンとのつながりは密ではないが、現地および西洋（アメリカ）から来たクリスチャンたちのクリスト教生活の影響を受けて教化されていると述べる。これは当時、日本人教会がエスニック教会としてハワイの社会にあって独自の展開をはじめている状況を示している。同時にそれはミッションの管轄からの独立をも予知しており、「日本ミッション支部」としての役割が終わることをも予知してはいないか。ギュリックはそれでもハワイのクリス教文明の日本人への感化力を信じ、日本よりもハワイの方が伝道地として優れていることを信じていた。それ故、たとえいつか日本人教会がすべて独立自給してしまおうと、日本ミッション「支部」としての役割が終わろうとハワイにとどまったのではないか。

最後に、こうした日本人教会の建設運動及びギュリックのそれへの対応は、当時の社会状況との関連においてどのような意味をもっているのか考えてみたい。

まず、日清戦争の影響が日本だけでなく、ハワイの日本人にもあったことである。ギュリックの書簡（一八九五・一・三〇）によれば、ハワイ在住の元日本軍から日本に帰って朝鮮および中国に出兵するように日本人に呼びかけがあったり、日本語の新聞がこぞって日本人の愛国心をかりたてたりしたこともあって、ハワイの日本人から日本赤十字に三カ月間で一万ドルの寄付があったと報じている。¹¹⁶ 日清戦争によるナシヨナリズムの高揚は、日本人による教会の建設のための起爆剤となったと考えられる。¹¹⁶ 次に第二章で述べたように、ハワイ内での排日気運の高まりがある。こうした日本人排斥への様々な動きは、逆に日本人同士の間を強めることになったことが考えられる。更に、耕地伝道が耕主の利害と一致し、資金援助を受けやすい状態にあったことも考えられる。こうした社会状況を考慮に入れ

ると、日本人教会建設運動は、独立自給とまで至らないとしても、キリスト教文明の断固維持存続を唱えるハワイ（理想）と、アングロ・サクソン優越を理念として日本人を排斥していくハワイ（現実）のはざまにあった日本人クリスチャンが、ハワイの白人クリスチャンに対しても一つの意志表示ではなかったか。それはハワイのクリスト教（日本人を排斥するキリスト教）に対する訣別であり、同時にキリスト教の真髄を白人のキリスト教からきり離して日本人の手で同胞に伝えていこう（日本人の生活からでてきたコンテキスチャルなキリスト教）という宣言ではなかったか。もしそうならば、ギューリックの対応は日本人のこうした動きを認めつつも、時期尚早であるのでまだしばらくミッシェンの下にいなさいというパターンリズムの態度をとっていることになる。そして日本人クリスチャンがハワイのクリスチャンに訣別宣言をする前にマッタをかけたことになるまいか。日本人教会の独立運動の意義は今後日本人教会の伝道内容を詳して検討していくなかでもっと明らかにしよう。

むすび

ギューリックはハワイの日本人伝道を、日本ミッション支部として位置付け、政治的な過渡期にあってハワイの日本人伝道を指導してきた。

ハワイの厳しい状況にあって日本人伝道を担っていくということは、単にその場しのぎの対策ということではなく、社会的、政治的に厳しい条件を課せられることになった。それにはまず、ハワイ政府がその将来の中で日本人をいかに位置付けるか、ハワイの構成員としてか、排斥かという論議が反映していた。政治的な意味で日本人の急増は

アメリカへの合併、ハワイの白人支配に障害となり、宗教的な意味では日本人はハワイのキリスト教文明をむしろ「劣等」人種であり、決してハワイを支配する勢力になるべきうつわとして評価されていなかった。

ギューリックはこうした政治状況に呼応する形で、共和国支持、アメリカとの合併にハワイの将来を見出した。そのことは同時にハワイの白人支配、キリスト教文明の浸透とそれに付随する日本人排斥を容認していくことを意味したのではないか。しかして彼はハワイのキリスト教文明のかかえる矛盾のはざまにあって、日本ミッシヨ^ン支部”長としての自分の役割を、日本人の道徳的精神的な援助者として「和解者」としてあくまで日本人をキリスト教化し、究極的な三大人種のキリストによる一致に至らしめる所に見出した。

こうして始められた日本ミッシヨ^ン支部”としてのハワイ伝道はいったいどのような実体をもっていたかという点、アメリカン・ボードの日本ミッシヨ^ンに属する宣教師によってなると、日本人伝道者をまかなおうとする傾向をもち、熊本バンドを中心とした日本組合教会の影響をうけないいわゆるミッシヨ^ン付属のステーションとして位置付ようとした。これは日本組合教会によるアメリカン・ボードからの独立自給に逆行して、ミッシヨ^ン直轄のステーションを一つ設けていくことを意味していたのではないか。ギューリックはこのミッシヨ^ン付属のステーションで、日本組合教会の影響をうけずに若い伝道者と共に日本ではできない農民への伝道を日本でできなかった宣教師と日本人クリスチャンとの密なつながりを土台にはじめようとしたのではないか。

しかし、日本ミッシヨ^ン支部”としてのハワイ伝道が日本ミッシヨ^ンでありながら伝道地がハワイにあるという二重性をもっているように、そしてハワイの日本人伝道がハワイ伝道と日本伝道との接点に位置しているように、ハワイの日本人伝道はハワイ政府と日本人のはざまに立たされる。ギューリックがキリスト教文明に将来のハワイの繁

榮を見、日本人をキリスト教文明化しようとする程、彼の描くキリスト教国ハワイと、日本人を排斥している現実のハワイという矛盾はどんどん大きくなっていかざるを得なかった。日本人教会の建設運動はこうした矛盾状況に立たされた日本人伝道者達のハワイのキリスト教文明に対する無言の抵抗という意味があったのではないか。このことは同時に、日本ミッシェン「支部」としてのハワイ伝道がその役割を終える時、すなわちミッシェン付属のステーションから、日本人が自治管理するステーションに代わることを予知したのではないか。

ギューリックは一八九八年以降もハワイアン・ボードの日本人部長としてとどまり、日本人伝道のために寄与した。表面的には何ら変化がおこっていないように思えるが、彼の身に一つ大きな変化がこの時起こっていた。その変化とは、一八九八年以降、アメリカン・ボードの日本ミッシェンの名簿から彼の名前が消え、ハワイミッシェンの名簿に彼の名前が付加されていることである。⁽¹¹⁷⁾ そのことは、日本ミッシェン「支部」長としてのギューリックの役割が終わったことを示すと共に、ハワイの日本人伝道部長として本格的に日本人のエスニック教会を統率していくはじまりをも意味するのではないか。このことは彼の一九九八年以降の活動の分析を通して明らかになる。⁽¹¹⁸⁾ また最初にこたわったように本研究はギューリックのハワイ伝道の視点を中心に置いた。そのため当時の日本人伝道者の伝道実体を解明し、ギューリックのそれとつき合わせる段階にまで至っていないので、その点に関しては今後の課題としたい。

本稿執筆に当たって Rev. Akira Shimizu, Dr. Tenuo Kawata, Dr. Masato Matsui, Mr. Oscar Burdick, Dr. Franklin Odo, Ms. Lela Goodell, Mr. Yasuto Kainara, 杉井六郎教授、坂口満宏氏、Nuuanu Congregational Church, The Hawaiian Mission Childrens Society Library, Hawaiian and Pacific Collection, Hamilton Library, University of Hawaii, Graduate Theological Union Library などの協力を得た。厚く謝意を表したい。

注

- (1) Sandra C. Taylor, *Advocate of Understanding: Sidney Gulick and the Search for Peace with Japan* (The Kent State University Press, 1984). 茂義樹「ミッドニー・キョーリックについて—排日法案をめぐる一問題研究」三四号、本井康博「スカター家の人びと—L・L・ジェーンズと熊本ハンズをめぐる一十年」などに関する試みがある。
 - (2) pp. 265f.
 - (3) pp. 45f.
 - (4) 同ページ。
 - (5) 拙稿「公衆主義とハワイ日本人社会」(『キリスト教社会問題研究』三四号)。
 - (6) 今回の資料はこの図書館に収められてゐる。Graduate Theological Union Library, Mission Children's Society Library. なお、キョーリックは O. H. Gulick, *The Pilgrims of Hawaii* (New York: Fleming H. Revell Company, 1918) を出版してゐる。
 - (7) Gulick to Clark (July 25, 1892), *The Friend* (August, 1892).
 - (8) 江口にうつては、飯田耕二郎「同志社出身の初期ハワイ伝道者の足跡」(『キリスト教社会問題研究』三四号) 参照。
 - (9) 拙稿「前掲、飯田耕二郎、前掲及び杉井六郎「遊行する牧者—辻密太郎の生涯」(教文館、一九八五)二八三ページ参照。
 - (10) *The Friend* (July, 1892) "He [Okabe] met the Gulick's brothers and was informed that Mr. and Mrs. O. H. Gulick intend to visit the Islands in the fall."
 - (11) Okabe to O. P. Emerson (August 15, 1892).
 - (12) *ibid.*
 - (13) 照裕の説明に「He is a graduate of Doshisha College of Kyoto and can talk the English very well, and wants to learn business in American store.」(*ibid.*)
- 岡部は一年間も増田の面倒を自分の家にとめてやり、就職の世話をする。尚、増田にうつては飯田耕二郎「ハワイ

移民会社業務代理人・増田知次郎にこうして(『況』四号)。

- (14) Gulick to Clark (September 15, 1892). キーリックによれば、この会議で団部を合わつた。
- (15) Gulick to Clark (December 24, 1892).
- (16) Gulick to Clark (December 24, 1892), *Missionary Herald* (1893), p. 160 の "Arrival in the US" にキーリック夫妻が二頁に亘って記述したところをこうする。
- (17) *The Friend* (August, 1891).
- (18) Emerson to Judson Smith (September 2, 1892).
- (19) この申し入れは、*ザ・フレンド*のキーリックに、*ザ・エトーン*からなされた。Gulick to Clark (October 27, 1892).
- (20) *Annual Report of the Hawaiian Evangelical Association* (1893) p. 13 に、*ザ・フレンド*のミックネルは九月二十八日に死亡したとある。
- (21) Emerson to Smith (December 7, 1892).
- (22) *ibid.*
- (23) Emerson to Gulick (November 18, 1892), Gulick to Clark (December 24, 1892).
- (24) *Annual Report of the Hawaiian Evangelical Association* (1894, p. 11).
- (25) Gulick to Clark (October 27, 1892).
- (26) Gulick to Emerson (October 26, 1892).
- (27) Gulick to Clark (December 24, 1892).
- (28) Gulick to Clark (January 31, 1893).
- (29) Gulick to Clark (March 14, 1893), Gulick to Clark (May 12, 1893).
- (30) Gulick to Clark (May 12, 1893).
- (31) 土肥陋夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』(日本キリスト教団出版局、一九七五)、茂義樹「日本基督伝道会社の独立と海老名禪正」(『キリスト教社会問題研究』二四号)参照。

- (32) "Aloha! Aloha!" (*Missionary Herald*, March, 1893, pp. 91-93), (op. cit., April, 1893, p. 132), (op. cit., May, 1893, p. 177), (op. cit., July, 1893, p. 261), (op. cit., December, 1893, pp. 511f), "What the Hawaiians Have Received Through the Missionaries of the American Board" (op. cit., January, 1894, pp. 18f.), etc.
- (33) Gulick to Clark (May 22, 1893).
- (34) ケナーの手紙に説明はアメリカン・ボード会計のワードを通じてキューリックの下に送られて来た。
- (35) 「」及び「」は *Annual Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions* (1893), p. 81 を参照のこと。
- (36) p. 81.
- (37) 杉井大郎「組合教会記録にみる海外伝道」(『キリスト教社会問題研究』二二四号)参照。
- (38) Gulick to Clark (June 5, 1893).
- (39) Gulick to Clark (September 23, 1893).
- (40) Gulick to Clark (January 17, 1894).
- (41) Gulick to Clark (February 3, 1894).
- (42) キューリックは(41)の書簡で、日本よりハワイの方が伝道地として広いフィールドをもっているところがある。
- (43) Clark to Gulick (June 22, 1894)をみると、キューリック夫人も六月一日付でクラークに手紙を出している。
- (44) *The Friend* (August, 1894)ではスミスからフイアン・ボードに送った手紙が一部掲載されている。
- (45) *Annual Report* (ABC FM, 1894, p. 77)の日本ミッションの報告では、"Residing in the Hawaiian Islands for labor among the residing Japanese"としてキューリック夫妻の存在が述べられている。
- (46) Gulick to J. B. Atherton, W. W. Hall, C. M. Hyde, P. C. Jones, O. P. Emerson (October 8, 1894), Gulick to Clark and Smith (October 17, 1894).
- (47) Gulick to James L. Barton (December 13, 1894).
- (48) Gulick to Clark (April 8, 1893). Gulick to Clark (May 12, 1893).
- (49) Gulick to Clark (August 23, 1893).

- (8) Gavan Daws, *Shoal of Times: A History of the Hawaiian Island* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1968), p. 128.
- (15) Gulick to Clark (May 30, 1894), Gulick to Clark (April 16, 1894) 杉井六郎の譯註「most initial step in self government is prophetic of a peaceful and happy solution of the questions of the future」杉井六郎。
- (16) Gulick to Clark (May 30, 1894).
- (17) Gulick to Smith (February 6, 1896).
- (18) "Victorious Japan" (March, 1895), "Annexation Prospects" (December, 1896), "Japanese Immigrants Excluded For Fraud" (April, 1897), "More Japanese Immigrants" (May, 1897), "Hawaii Refuses Japan's Demands" (June, 1896), "Japanese Negotiations" (July, 1897), "Proposed Negro Immigration Undesirable" (September, 1897), "Rumored Japanese Schemes Against Hawaii" (September, 1897), "The Hawaiian Senate Ratify the Treaty of Annexations" (October, 1897), "Anti-Annexation Mass Meeting" (November, 1897), "Arbitration Between Japan and Hawaii" (November, 1897), "America's Place in Missions" (December, 1897), "For Annexation" (December, 1897), "Annexation in Congress" (January, 1898), "Asiatic Contract Laborers" (March, 1898), "Why the Sugar Trust Oppose Annexation" (July, 1898), "America Shamed Without Annexation" (July, 1898), "Annexation Hopefully Near" (July, 1898).
- (19) "Japan and China at War" (*The Friend*, October, 1894), "Great Japanese Victory" (ibid.), "Victorious Japan" (op. cit., March, 1895).
- (20) *The Friend* (June, 1897).
- (21) 『やまこ』(一八九七・四・一)。杉井六郎『遊行する牧者』二九六ページに指摘されてゐる。
- (22) 『やまこ』(一八九七・四・一)。
- (23) "Hawaiian Evangelical Association" (*The Friend*, September, 1897).
- (24) Okabe to Clark (December 24, 1892).
- (25) 杉井六郎「組合教会記録にみる海外伝道(一)」。

- (62) 飯田耕二郎、前掲。
- (63) 杉井六郎『遊行する牧者』飯田耕二郎、前掲。
- (64) 杉井氏は岡部の兄岡部太郎がこゝではたす役割の可能性を指摘している(杉井六郎『遊行する牧者』二八四ページ)。
- (65) デイヴィスは二人がハワイに行く可能性のあることをハワイアン・ボードに次のように知らせた。
The Friend (December, 1892) 'I am happy to report that two members of the last cogerigate class of Doshsha are likely to go to your help by the next opportunity, though they are not definitely given their pledge yet. Their names are Takamori and Egami. They are good men earnest christian spirit, and we hope that they will do good among the thousands of their countrymen in Hawaii.'
- (66) Emerson to Smith (December 7, 1892).
- (67) Okabe to Emerson (September 15, 1892).
- (68) 'When two other missionaries come from Japan, I am make room and salary for them...' と岡部は二人の到着を知っていたかのやうに(69)の手紙で述べられている。
- (69) 奥村多喜衛は、一八九四年の日記をもとにしてつくった『楽園おち葉』第一号(一九四一・一)の四ページでこう述べている。飯田氏は『恩寵七十年』を引用してこのことをすでに紹介している(飯田耕二郎、前掲)。
- (70) Gulick to Clark (May 30, 1894).
- (71) コハラにはその後奥村が臨時に行き、その後木村芳五郎が一八九八年八月に赴任する。
- (72) *Annual Report of HEA* (1900).
- (73) Gordon to Emerson (September 21, 1895).
- (74) 飯田耕二郎、前掲。キョーリックは書簡(一八九四・一〇・一九)で神田がS・キョーリックの先生であり、助手であったと証している。
- (75) 拙稿「ハワイ移民の母・宋栄子の生涯と信仰」『基督教世界』一九八五・五・一〇)。
- (76) 飯田耕二郎、前掲。
- (77) Gulick to Clark (April 16, 1894).

- (76) 拙稿「移民社会とキリスト教―美山貫一のハワイ日本人移民伝道」(『キリスト教社会問題研究』三二号)。
- (79) 拙稿「合衆主義」とハワイ日本人社会」。
- (80) *Annual Report of the HEA* (1894).
- (81) "Consul General - Shimamura's Estimate of the Japanese Evangelists" (*The Friend*, March, 1896).
- (82) *Annual Report of HEA* (1898). 尚、曾我部四郎は、耕地支配人プラーと協力して日本人労働者の教化をはかったので、生産力が向上したとらう(中野次郎『ホノム義塾・曾我部四郎伝』一八九五・一〇〇ページ)。
- (83) Ronald Takaki, *Pau Hana: Plantation Life and Labor in Hawaii* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1993, p. 109).
- (84) 拙稿。
- (85) 杉井六郎『遊行する牧者』二九六―二九七ページ。
- (86) ギョーリックのいわゆる風紀問題についてのアプローチは、宋榮子をハワイに呼んだときにはじまる(拙稿「ハワイ移民の母・宋榮子の生涯と信仰」)。
- (87) *Annual Report of HEA* (1893).
- (88) 「布哇来信」(『基督教新聞』一八九四・二・二三)。部屋代は Ladies Kindergarten Association of Honolulu がまかかった(Gulick to Clark, January 30, 1895).
- (89) Gulick to Clark (May 30, 1894)。一八九七年九月に甲賀ふじが来るが、この手紙とのかかわりはわからない。尚、甲賀ふじについては茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』(新教出版社、一九八六)、一八六ページ参照。
- (90) Gulick to Clark (January 30, 1895).
- 『Japanese Response to Woman's Board of Mission' by Caroline D. Castel (*The Friend*, August, 1895) では、佐々倉夫人はその後健康を害して幼稚園を一時やめたこと。耕地支配人が彼女のため家を貸すことを約束してくれたことを報じている。
- (91) それより以前、一八九三年に神田重英がコハラに日本人最初の日本語学校を設立したという説がある(飯田耕一郎、前掲)。尚、奥村のつくった小学校の規則については沖田行司「海外移民の教育史的研究―布哇『殖民新聞』の教育記事を中心と

- して」(『キリスト教社会問題研究』三五号)参照。
- (92) 奥村「布哇通信」(『基督教新聞』一八九五・一〇・一八)。 *Annual Report of HEA* (1896)。
- (93) 『やまと』(一八九六・五・五)。
- (94) 『やまと』(一八九六・五・五)。尚、桑原については『樂園もち獲』(一九四一・五)の三一四ページに紹介がある。
- (95) 『基督教新聞』(一八九八・七・二九)には生徒がふえて教室がせまくなってきたので教室と寄宿舎を建てるのが記され
てゐる。
- (96) 沖田行司、前掲。
- (97) *Annual Report of HEA* (1897)。
- (98) *Annual Report of HEA* (1898)。
- (99) 拙稿「金業主義とハワイ日本人社会」。
- (100) 「布哇通信」(『基督教新聞』一八九三・一〇・六)。
- (101) *Annual Report of HEA* (1898)。
- (102) “Notes on the Japanese Work” by O. H. Gulick (*The Friend*, April, 1898)。
- (103) Mary Kuramoto, op. cit., pp. 28-42.
- (104) *Annual Report of HEA* (1892)。
- (105) *Annual Report of HEA* (1894)。
- (106) 岡部「布哇来信」(『基督教新聞』一八九三・一〇・六)。
- (107) *Annual Report of HEA* (1896)。
- (108) O. H. Gulick, J. B. Atherson, P. C. Jones, T. Okumura, F. W. Damon (“Report to the Hawaiian Board of the
Superintendent of the Work among the Japanese, regarding the Purchase of the Premises on the corner of Nuuanu
and Kikui Sts. including the Parsonage,” *The Friend*, January, 1898) 又募金総圖に於て。
- (109) *ibid.*, *Annual Report of HEA* (1897)。
- (110) 『やまと』(一八九六・五・二六、六・九六、一、一、七、一)。

- (10) 『やまと』(一八九七・六・八)。
- (11) *Annual Report of HEA* (1896).
- (12) キョーリックはこのために五百マンの寄付をした(『やまと』前掲)。
- (13) *Annual Report of HEA* (1897).
- (14) “Japan and China” (*The Friend*, November, 1894), “Japanese Celebration” (*The Friend*, Friend, June, 1895),
Annual Report of HEA (1895).
- (15) Hiary Conroy, *The Japanese Frontier in Hawaii, 1868-1898* (Berkeley: University of California Press, 1953, pp. 94-96) の『日清戦争と』日本軍艦のハワイ入港が愛国心を高めたことを指摘している。
- (16) *Annual Report of ABCFM* (1898).
- (17) 日本伝道とハワイ日本人伝道のつながりの問題は、スカダーや小崎弘道などにおいてもひじょうに密接なことがらとしてとらえられている。今後の検討が期待される。尚、小崎のハワイ伝道観についてはすでに杉井氏によって「出稼ぎ」伝道的、「植民地伝道」的発想が示されているとの指摘がなされている(『逆行する牧者』三三七ページ)。